

健康には気を付けて)。

総合報告を書くこと

総合報告などという、じじむさい感じがする。しかし、ベテランだけのものではない。仕事が一段落した時点で、自分の関連分野のレビューを行なうことは非常に有益である。自分の研究を深めていくとき、直接関係する分野の過去から現在までの流れと、隣接分野との関連を、文献などによって自分なりに整理しまとめることは骨の折れる仕事である。時には時間の浪費のように思われることがある。しかし、レビューを行ない総合報告を書くことによって、自分の仕事はどういう所に位置しているか、今後どういう方向に伸ばしていくべきかなど、示唆を受けることが多い。

私は、勧められて大気乱流の構造や拡散、輸送などについて総合報告を書いたことがある。それまで雑然としていた知識をまとめるよい機会になったし、そのあと論文を書くときのメモともなり、非常に役に立っている。総合報告ではないが、関連ある学会やシンポジウムの予

稿集を読んだり、あるいはそれらの目次に目を通すだけでも啓発されることが大きい。

最後に一言

研究調査は生涯を通して行なうべきものと言われる。実際その通りであると思う。たとえ小さいことでも、新しくやり遂げたという感じは格別である。もし、それが気象業務とか何かに役立つとすれば、なおさらである。

さて、生涯を通して行なうべきものということは、いつでもできるというものでもない。若いうちに始めるのがよい。ほかのものにあまり捉われなくて熱中できるのは、青年の特権でもある。年輩になってから記憶を多分に必要とする基礎から始めようとしても、能率が悪い。

つぎに、できるときに骨惜しみしないでやっておくことである。身体の調子のよくないときや、家族に病人が出たりした場合には、思うように研究調査に打ち込めないことも多い。自分の経験から老婆心までに述べただけである。

気象学会および関連学会行事予定

行 事 名	開 催 年 月 日	主 催 団 体 等	場 所
第1回南極気水圏 シンポジウム	昭和53年12月5日		国立極地研究所
構造物の耐風性に関する 第5回シンポジウム	昭和53年12月5日～6日	日本気象学会	気象庁
気候変動シンポジウム	昭和53年12月7日		気象庁
月例会「レーダ気象」	昭和54年2月23日	日本気象学会	気象庁
月例会 「長期予報・大気大循環」	昭和54年3月1日	日本気象学会	気象庁